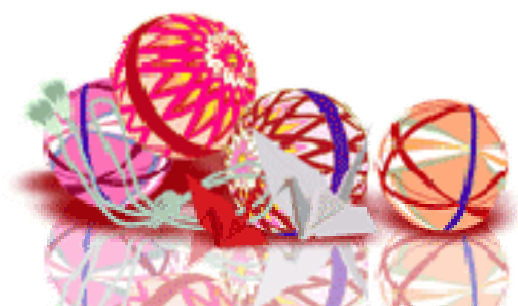


第34回貴重書ミニ展示

源氏物語 若菜上の巻

—生涯学習セミナー「源氏物語への誘い」—



展示期間：12月1日（木）～12月14日（水）
鶴見大学図書館1階エントランスホール

1. 源氏歌留多 江戸時代後期作 1組

銀覆輪の厚紙（縦7.6、横5.1糎）に金揉箔を散らした歌留多。『源氏物語』より各巻1首ずつ抜き出した和歌を、上下句で読札・取札に書き分ける。読札には巻名・和歌の上句・当該巻と縁のある景物、取札は下句の散らし書きとする。54帖分108枚の揃いを緑色地小葵文緞子の帙に入れ、黒漆塗箱に収める。コハゼは銀。贅沢で気の利いた遊び道具と言えよう。

人物をまったく登場させない様式の源氏歌留多は珍しいのではなかろうか。草花・樹木・虫・調度品などを愛らしく描き、顔料の落剥もほとんどない美品。



2. 源氏物語歌留多 江戸時代末期刊 読札・絵札共107枚

絵札縦6.9、横4.8糎。読札はやや小さく縦6.0、横4.0糎。各54帖分すなわち108枚あったはずだが、絵札1枚を失って107枚存。絵札を入れる袋に「甘泉堂 錦朝楼」と刷られているので、芝神明前の地本問屋和泉屋市兵衛刊行、歌川国虎の絵と推測される。和泉屋市兵衛は喜多川歌麿・安藤広重らを世に出した名書肆、歌川国虎は初代豊国門下の異才で現在ほとんど風景画しか残っておらず、歌留多の小画面ながら大首絵風に人物を描くところ、この絵師としては珍しい作例と言えよう。

絵柄は源氏物語とは関連が薄く、江戸の草紙類たとえば『倭紫田舎源氏』（にせむらさきいなかげんじ）の挿絵に近い。読札に「春ははやなじみになりぬ門まつはまだ里にでぬ年のうちから」とある如く、遊里の風俗を主題とするものである。



3. 源氏物語双六 江戸時代後期刊 うちやう1枚・袋綴28冊



縦7.0、横4.9糎の可愛らしい豆本に縦26.1、横42.6糎の遊び方説明書「源氏双六うちやうの事」を添え、若松模様の小形桐箱に収める。豆本1冊には源氏物語2帖分の梗概・代表歌・挿絵を刷るので、27冊にて54帖分、それに大意・目録1冊を加え、都合28冊。双六盤の図を描いた説明書によれば、この豆本を駒として用い、試合の最後に残った本の題籤の数字を合計して勝負を決める。おなじみの「まわり双六」ではない。

細部まで丁寧に作られた遊び道具であり、江戸時代相当好まれたらしく豆本のみは時折見かけるが、「源氏双六うちやうの事」や箱まで揃ったのはかなり珍しい。縹色表紙及び朱題籤は当時最も流布した注釈書『源氏物語湖月抄』にならったものか。掲出本に刊行年を示す文言はないけれども、寛延2年（1749）皇都新町吉田屋善五郎の刊記を持つ伝本があり、このあたりを初出と見たい。

4. 源氏かるた絵合 江戸後期写

厚手楮紙（縦39.0、横54.0糎）の畳物。中央に琵琶湖と石山寺、その周囲を源氏物語各巻に由来する短冊形の絵54枚で埋める。源氏香と巻名を刷った札を乗せて遊ぶものであった（中野幸一『源氏物語の享受資料』）が、現在その札を欠く。しかし多色刷りの袋が残り、「湖月抄」「源氏かるたゑあはせ」等の文字が見えるのはうれしい。

中央画面左寄りに「洗心斎綾岡筆」の書名があり、池田綾岡（通称奈良屋吉兵衛、1817～1887）の作と判明する。綾岡は団扇絵を得意とし、能書としても知られていた。掲出資料は比較的早印であろう。他に、「江戸日本橋榛原」の朱印を押すもの、明治20年（1887）後刷りも残る。前者「榛原」は、団扇絵を通して綾岡と交渉のあった幕末明治の団扇問屋兼本屋、榛原直次郎であろう。なお綾岡画・榛原直次郎刊行の遊技具に、『ひやくにんしゅまはりすごろく』－「ひやくにんいつしゅ」ではありません－がある。



5. 源氏絵宝枕 正徳3年（1713）刊 卷四欠 袋綴3冊

縹色地に草花・梅樹・霞等の鍮泥下絵紙表紙（縦26.4、横18.0糎）。中央に朽葉色題簽（縦17.6、横4.4糎）を押し、子持枠中に「源氏絵宝枕」と刷る。振り仮名は「げんしゑほうまくら」。本文、毎半葉10行21字程度（印刷面縦約19.5、横14.4糎）。巻頭に序文2丁。『源氏物語』各巻の紹介記事を右面に、四周単辺（縦19.5、横14.4糎）で囲んだ古雅な絵を左頁に配し、見開きで1帖分となる。第1冊15丁、第2冊15丁、第3冊17丁。第4冊欠。

他本によれば「正徳三年巳ノ正月吉日 大野木市兵衛」の刊記を持つ。万治3年鱗形屋版の『源氏鬢鏡』の内容を受け継ぎ、版面構成と図柄とを変えて出版したもの。『源氏物語』の簡略な説明に発句を加えて楽しむ、趣味性の強い書物である。伝本希少。掲出本は、第1冊最終丁ウラが須磨巻の紹介であるために第2冊は須磨巻の絵から始まり、巻頭部は見開きで1巻分の原則からはずれる。第2冊最終丁ウラは白紙なので、第3冊は見開きを1巻分に当てる合理的な形式に戻る。このことから、2冊仕立てが本来の姿であったかと推され、その各冊をさらに分冊して4冊とし、最後の冊を失ったのが現状と言うことになる。『源氏物語』の猫、と言えば女三宮の身近に飼われていたものを誰もが思い浮かべる。原文では「唐猫のいとちひさくをかしげなる」と紹介されるが、第3冊40丁オモテの猫は、どう見ても相当大きい縞模様の虎猫—あまり可愛くもなさそう—である。御簾を引き上げて悲劇の原因を作った綱は描かれていない。なお、当該の事件は『源氏物語』若菜上に書かれるが、掲出本では若菜下に割り当てる。



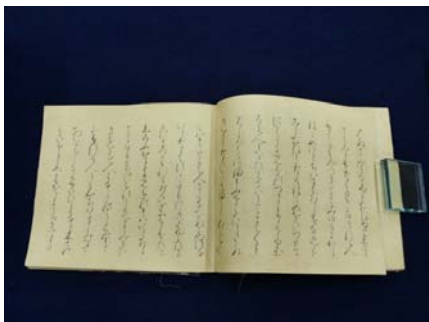
6. 源氏物語画帖 江戸時代前期制作

原装(縦26.0、横21.0 糎 16枚)源氏物語絵色紙を当館で折本状にしたもの



7. 源氏物語 若菜上 紫式部著 江戸時代中期写

縦16.5、横18.0 糎 53帖(帯木を欠く) 緞子表紙 列帖装



8. 絵入源氏物語 若菜上 紫式部著 寛文頃

縦15.3、横11.2 糎 30冊

本文54巻、爪印3巻、系圖1巻、山路の露1巻、引歌1巻



9. 絵入源氏物語 慶安3年(1650)山本春正跋 承応3年(1654)刊 袋綴60冊

紺色無地紙表紙(縦27.0、横18.2 糎)中央に素紙題簽(縦16.7、横3.4 糎)を押し、巻名・巻序等を刻す。本文に匡郭なく、毎半葉11行21字前後。句読点・濁点を付刻、ままた人名・官職名・地の文と心内語の区別等も傍記する。絵は片面・見開き両様、四周単辺(縦18.7、横14.5 糎)内に山本春正の手になる大和絵風の画面が展開する。

物語本文54冊、山路の露1冊・系図1冊・引歌1冊・目案3冊を加え、これに豊富な絵を添えて親しみやすく出版、以後の写本・版本に大きな影響を与えた。夢浮橋巻末に「承応三甲午稔八月吉日／洛陽寺町通／八尾勘兵衛開板」の刊記。おそらく初印は慶安3年であり、掲出本はそれに続くもの。刊行を企画した山本春正(1610～1682)は当時著名な蒔絵師、松永貞徳(1571～1653)の弟子となり和歌にも堪能であった。

10. 絵入源氏物語 横本 万治3年(1660)刊 袋綴29冊

紺色無地紙表紙(縦14.7、横21.3 糎)の美濃版半裁本。押発装の痕跡あり。表紙中央に素紙題簽(縦11.1、横3.3 糎)を押し、複数帖を合冊するので「きりつほ／はゝ幾々」の如く刷り、右下に巻序を付刻。ただし分量の多い巻は1巻1冊仕立て。本文25冊・『目案』3冊・『系図』『山路露』1冊の全29冊。

